



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	となりのソ連人 : 中ソ友好連環画の「家族」たち
Author(s)	田村, 容子
Citation	連環画研究, 10, 34-63
Issue Date	2021-09-30
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98493
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98493
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_10_34-63.pdf



となりのソ連人——中ソ友好連環画の「家族」たち

田村 容子

はじめに

1949年12月、毛沢東は、スターリン生誕70周年祝賀式典に参加するため、ソ連を訪問した。翌年1月、続いて周恩来が「中ソ友好同盟相互援助条約」締結のため、代表団を率いてソ連を訪れ、毛沢東とともにモスクワに長期滞在した¹。2月14日、条約が締結されると、いわゆる「中ソ蜜月」時期が到来する。

「中ソ友好同盟相互援助条約」は、中国とソ連が日本を仮想敵国とした軍事同盟である。この条約締結により、ソ連から中国に対する3億ドルの経済援助や、中国長春鉄道、旅順・大連の海軍基地の返還が約束され、1952年に鉄道が、55年に旅順が中国に返還されている。中国とソ連の間の文化交流も促され、56年には、文化合作協定も結ばれた。49年から58年にかけては、134の中国の芸術団体がソ連を訪問し、中国では延べ20億人近くが747本のソ連映画を観賞し、ソ連側では112の芸術団体が中国を訪問し、ソ連国内で102本の中国映画が上映されたという²。

この「蜜月」期は長くは続かず、1950年代末には、両国の関係は悪化し始める。フルシチョフによる56年のスターリン批判および西側との平和共存路線の採択や、59年の訪米を契機として、1960年代にはソ連は一転して中国の敵国となり、西側に歩み寄る、裏切り者の「ソ連修正主義（中国語での略称「蘇修」）」という扱いとなった。

中華人民共和国のポスターおよび連環画に見られる、「友好」と「敵対」、それぞれの時代のソ連イメージについては、武田雅哉「よい熊さん わるい熊さん——中華人

¹ 『人民日報』「鞏固中蘇両国邦交，發展中蘇人民友誼！毛主席訪蘇会见斯大林大元帥」1949年12月18日第1版、「奉毛主席指示参加鞏固中蘇邦交的会商 周恩来總理抵莫斯科 米高揚維辛斯基等及各国使節到車站歡迎」1950年1月22日第1版、「毛主席離莫斯科返國 行前在車站發表臨別演說 莫洛托夫等前往車站送行 人民民主國家駐蘇使節均抵站歡送」1950年2月20日第1版および徐則浩編『王稼祥年譜 一九〇六—一九七四』中央文獻出版社、2001年、391頁による。王稼祥は「中ソ友好同盟相互援助条約」締結の時期、中央人民政府外交部副部長として駐ソ連大使をつとめた。

² 肖玉秋主編、岳巍著『中俄文化交流史 中華人民共和國卷』天津人民出版社、2016年、4頁。同時期中ソ文化交流については、田村容子「『蘇聯展覽館』の記憶——中華人民共和國における〈ソ連〉イメージの形成と変遷」『饕餮』第23号、2015年、田村容子・越野剛「中国映画における『白鳥の湖』の受容と変奏」『饕餮』第28号、2020年も参照されたい。

民共和国の図画像資料に見えるロシア・ソ連イメージ——」³に概略がまとめられている。本稿では、「敵対」に至る前、1950年代の中ソ友好時期における連環画作品の特徴を掘り下げてみたい。

まず、連環画に関連する出版物の全体状況を確認しておこう。1950年代には、中ソ友好を謳う連環画のほか、ソ連の偉人の伝記、小説や児童向け読み物を題材とした連環画、ソ連の社会主義体制下の農業や工業、文化を紹介するグラフ誌が、陸続と出版された。

1951年8月に創刊された、新刊書を紹介する雑誌『全国新書目』の1950年版には、ソ連関連の出版物として「蘇聯教育」の項目に47点、「蘇聯現狀」の項目に32点の書名が確認できる⁴。また、

『中国連環画目録彙編』には、1950年に出版されたソ連ものの連環画として、『列寧在一九一八（1918年のレーニン）』（上・下巻、中芸社・泰興出版社、1950年4月）、『中蘇友好万歳』（程十發絵画、立化出版社、1950年8月）、『蘇聯集体農場（ソ連のコルホーズ）』（新華出版社、1950年9月）、『列寧画伝（レーニン画伝）』（江豊ほか絵画、大衆美術出版社、1950年11月）などが見える⁵。

1951年5月に創刊された連環画専門誌『連環画報』には、第一期よりソ連作家の原作にもとづく連環画が掲載された⁶。第十期（1951年10月）は表紙をスターリンの図像⁷が飾り、巻頭に「蘇聯快到共產主義社会了（ソ連にまもなく共產主義社会が到来する）」⁸が掲載される。【図1】

そのほか、グラフ小冊子「蘇聯画庫」シリーズなど、複数の「画庫」シリーズが刊行された。【図2】シリーズの各巻末に掲載された広告によれば、「蘇

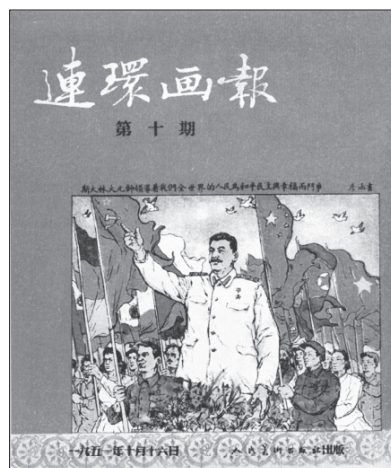


図1『連環画報』第十期表紙



図2「蘇聯画庫」シリーズ

³ 武田雅哉「よい熊さん わるい熊さん——中華人民共和国の図画像資料に見えるロシア・ソ連イメージ——」『ユーラシア地域大国の文化表象』ミネルヴァ書房、2014年。

⁴ 『一九五零年全国新書目』中央人民政府出版総署図書期刊司編印、1951年8月、40-41、45-46頁。

⁵ 以上は王玉興彙編『中国連環画目録彙編』上海画報出版社、2003年にもとづく。現物は未見。

⁶ 蘇聯 H.突利琴作、徐淦編、張慈中画「和平鴿」『連環画報』第一期、1951年5月、全22コマ。

⁷ 彦涵画「斯大林大元帥領導着我們全世界的人民為和平民主与幸福而闘争」。

⁸ 徐鍾師編、魯少飛・阿維・張貽能画「蘇聯快到共產主義社会了」、全15コマ。

聯画庫」は1949年創刊、写真はソ連対外文化協会およびタス社などの提供で、上海の晨光出版公司による編集、出版である。表紙はカラーのものが多く、1952年11月の時点で50冊まで発行されており、その後も刊行が続いたようである⁹。【図3】

同じ晨光出版公司による編集、出版に、「新中国画庫」シリーズもあり、その第4巻は『毛主席在蘇聯』である。冒頭で述べた、1949年12月から翌年2月にかけての、毛沢東のソ連訪問期間中の活動内容が、写真入りの記事で詳しく紹介されている¹⁰。

そのほか、「中蘇友好画庫」シリーズが、北京市中蘇友好協会により編集、人民美術出版社により出版された¹¹。

手元には、「通俗科学知識図画」シリーズの『蘇聯介紹』¹²という小冊子もある。その「前言」には、中国が新民主主義から社会主義の社会に向かって現在の現在、ソ連に学ぶことが喫緊の課題である旨や、同シリーズが、交通・文化・教育・都市・農業・水利・畜産などについて、八冊に分けて刊行する計画であることが述べられている。【図4】

このように、中ソ友好時期においては、ソ連に関する広範な知識の提供がめざされたため、連環面の扱うテーマも幅広い。前述の武田雅哉「よい熊さん わるい熊さん」には、『レーニン（列寧）もの』

とも言うべきジャンルが確立できるほど、レーニンを描いた作品が多い¹³ことや、「ソ連映画を連環面に仕立てたもの」、「技術指導者として派遣されてきたソ連の専門家と



図3「蘇聯画庫」シリーズ広告



図4『蘇聯介紹』表紙

⁹ 「蘇聯画庫」シリーズは、現物を確認できた19点は、1949年から53年にかけてのものである（第4巻『新莫斯科』1949年11月10日初版、第54巻『全蘇聯業余文工団大検閲』1953年4月5日初版）。

¹⁰ 「新中国画庫」シリーズは、現物を確認できた39点は、1950年から53年にかけてのものである（第1巻『開国大典』1950年2月1日初版、第40巻『農村婦女学文化』1952年6月30日初版、53年3月10日四版）。

¹¹ 「中蘇友好画庫」シリーズは、広告によれば1954年3月の時点で20冊が刊行されている。

¹² 北京書店上海編輯部編輯、荒黎絵画『蘇聯介紹』第一冊、通俗科学知識図画シリーズ第四輯・史地常識・第六種、北京書店、1953年1月。

の友情を描くもの」が多いことが指摘されている。

同時期、中国ではソ連のことを「あにき（老大哥）」と呼びならわしていたが、連環画の中には、ソ連の女性技術者を描くものや、ソ連に学びトラクター運転手となる中国女性を描くものなど、女性を主人公とする作品もある。本稿で注目したいのは、1950年代に、中国人とソ連人が擬似的な「家族」関係を結ぶ物語が、連環画および小説において、いくつか見られるということである。家庭を題材にしたこれらの物語では、中ソの母親や主婦といった女性像が中心的に描かれる。

以下、本稿の構成は、大きく二つに分かれる。前半では、中国人とソ連人が隣人として交際する、あるいは同居して擬似的な家族関係を形成する物語を取り上げ、連環画と原作小説の比較を行なう。後半では、それらの連環画に図像化されるソ連のイメージに焦点をあて、連環画や小説に繰り返し登場するモチーフについて分析する。まず、連環画『鄰居（隣人）』¹³と、その原作小説について見ていきたい。

連環画『鄰居』の「内容紹介」

連環画『鄰居』の巻頭に置かれた「内容紹介」は、以下の通りである。【図5】

「劉桂蘭は働き者の農村女性である。夫は旅大市¹⁴のとある工場で働いており、行き来するのに不便なので、一家は市内に移住した。しかし引越したのち、隣近所がみなソ連人なので、劉桂蘭はこう思った。『外国人と一緒に住むなんて、これからおしゃべりするところもありやしない。それに、あちらさんはいい生活をしてるのに、こっちはどこをとっても敵わない。きっとバカにされちゃうんだわ。』そのため、気持ちがいじけていた。

しかし、事態は完全に彼女の予想を超えていた。彼女が部屋を片づけていると、ソ連人の奥さんであるニーナ（妮娜）とグーリヤ（克利亞）¹⁵が親切に手を貸し、床を拭



図5『鄰居』表紙

¹³ 王星原著、張国珍改編、楊錦文・張伯誠画、蔡振華封面設計、新芸術出版社、1956年8月、全72コマ。確認できた現物は奥付部分の破損が激しいため、インターネット上の画像も参考にした。<https://dy.163.com/article/EO2B7B8B05444SSL.html> (2021年7月9日確認)。

¹⁴ 旅大市は現在の遼寧省大連市で、かつての行政区分である。1950年11月に旅大行政交署と大連市政府が合併し、旅大市人民政府となった。1953年に中央政府の直轄市、54年に遼寧省の直轄市となる。1981年、旅大市は現在の大連市に改められた。木之内誠・平石淑子・大久保明男・橋本雄一『大連・旅順歴史ガイドマップ』大修館書店、2019年参照。

¹⁵ 中ソ友好時期の連環画や小説に登場するソ連人の名前は、中国人にとって親しみのある、あるいはそれらしく聞こえる音が当てられているようである。本稿では、推測可能なものはカタカナ

いたり壁を塗ったりしてくれた。【図6】

そのうえ自分の家から温かい料理とスープを運んできて、彼女に食べるよう勧めたのだ。お互いに言葉の隔たりはあったが、その温かさは家族のようだった。それから、劉桂蘭はしだいにソ連の隣人たちと親しくなり、彼女らの友情はますます親密になっていった。



図6『鄰居』10コマ

中ソ友好月¹⁶が始まった。建物じゅうのソ連の奥さんたちは、劉桂蘭にも彼女らと同じようにきれいな格好をさせ、一緒に「中ソ婦人交歓の夕べ」に参加した。帰宅する途中、ニーナは劉桂蘭に、夫とともに帰国することになったと告げる。劉桂蘭はそれを聞いて、とても悲しくなり、帰宅後、幾晩かかけて一對の平和の鳩を刺繍した枕を作り、記念の品としてニーナに贈った。別れの日、彼女は子供を連れて駅に見送りに行き、ニーナはソ連の礼儀をもって劉桂蘭にキスをし、劉桂蘭もニーナにキスを返して、二人は涙を流した。列車が動き出すと、劉桂蘭はだんだんと遠ざかっていく列車を眺めながら、それでもずっとハンカチを振りつづけるのだった。¹⁷

上記の「内容紹介」からは、この物語において重要な「鞋」にまつわるエピソードが抜け落ちているが、これについては後述する。また、物語全体の中では一瞬の場面にすぎないキスにまつわるやりとりが、丁寧に描写されている点からは、この行為の

で表記し、あわせて中国語原文の表記を示す。

¹⁶ 「中ソ友好月」とは、ソ連十月社会主義革命三十五周年を記念し、1952年11月7日から12月6日にかけて、中国全土で盛大な記念活動を行なったことを指す。期間中、ソ連対外文化協会の派遣するソ連文化工作者代表団が訪中し、講演会、座談会、映画上映、交歓会などが開催された。『人民日報』「中蘇友好協会總會 關於举行“中蘇友好月”的通知」1952年10月10日第1版。「首都各界昨晚举行盛会 慶祝十月社会主義革命三十五周年 毛主席蒞会、蘇文化工作者代表団等応邀出」1952年11月7日第1版。

¹⁷ 『鄰居』内容紹介による。原文は次の通り。漢字表記は原文に従った。「刘桂蘭是个能干的農村妇女，她的丈夫在旅大市一家工厂里工作，因为來往不便，一家搬到市内去住。可是搬去以后，左鄰右舍都是苏联人，刘桂蘭想：「跟外國人住在一起，今后連个說話的地方也沒有；再說人家生活过得很好，自己样样不如人家，会被人家瞧不起。」因此，她心里非常别扭。

可是事情完全出乎她意料之外，在她收拾屋子的時候，苏联大嫂妮娜和克里亞熱情地來幫助她抹地、刷牆，还从自己家里端來熱菜熱湯，請她吃喝，双方虽有着言語的隔閡，却親熱得像一家人一样。从此，刘桂蘭漸漸和苏联鄰居們熟悉起來，她們的友誼也越來越親密了。

中苏友好月開始了。全院苏联大嫂強着替刘桂蘭打扮得和她們一样漂亮，一起去参加中苏妇女联欢晚会。在回家的路上，妮娜告訴刘桂蘭，她要隨丈夫回國了。刘桂蘭听了，心里万分难过，回家以后，連夜綉了一对和平鴿的枕头，送给妮娜作为紀念。臨別那天，她帶着兒女到车站送行，妮娜用苏联礼節吻了刘桂蘭，刘桂蘭也吻了妮娜，兩人都流下了眼淚。火車開動了，刘桂蘭望着越走越远的火車，还一直在揮動着手巾。

重要性を紹介せんとする編者の意図がうかがえよう。なお、劉桂蘭一家が住んだのは、ソ連の軍官用住宅の古い倉庫だった部屋である。

連環画『鄰居』とその原作小説

この物語の原作は、1955年に発表された短編小説「鄰居」¹⁸である。作者の王星については未詳だが、後述するように、1950年代に中ソ友好を題材とし、旅大市を舞台とする小説をほかにも発表している。連環画は、原作の細かな描写やエピソードをいくつか省いたほかは、大きな筋の変更はない。連環画の説明文には、原作の文章が生かされており、原作に忠実な作品といえるだろう。

コマ	連環画の構成	原作小説との違い
1-3	劉桂蘭が新居に引っ越すまで。	原作には劉桂蘭の年が40過ぎと明記される。
4-7	桂蘭、新居に到着。ソ連女性を見かけて、囁かれているのだと思う。	原作はソ連の女性たちの服を詳細に描写する。ラシヤの上着、ハイヒール、薄絹のスカーフ、口紅(16頁)。連環画では図像として表現されるのみ。
8-14	翌日、二人の見知らぬソ連女性が部屋の片づけを手伝いにやって来る。	原作では二人のソ連女性は中国語を話し、ニーナは「明瞭な中国語(清楚的中國話)」が話せるが(17頁)、連環画ではニーナのみが「ぎこちない中国語(生硬的中國話)」を話す(11コマ)。
15-19	昼食時、手伝ってくれた二人のソ連女性が手料理を運んできて、一緒に食べる。ニーナとグーリヤの自己紹介。ニーナは25歳、グーリヤは30歳である。	原作はソ連女性を指す地の文や彼女らの話し言葉に、「マダム(媽大姆)」 ¹⁹ 「ハラショー(黒老少)」など、ロシア語を挿入し、末尾にそれぞれ「ロシア語で女性(俄語即婦女)」 「よい(好)」と注を付す(16、17頁)。連環画にはない。 原作ではソ連女性たちの自己紹介の際、「この住宅には全部で五戸のソ連軍官の家族が住んでいる(这院裏共住着五家苏联軍官家屬)」ことが明らかにされるが(17頁)、連環画では省略。

¹⁸ 王星「鄰居」『北京文芸』創刊号、1955年5月、16-22頁。

¹⁹ ここでソ連女性が劉桂蘭に対して「マダム」と呼びかけているのは、正確なロシア語とはいえ、相手に対する呼びかけは、ソ連では「同志(товарищ)」が政治的に正しい。外国人には、しばしば「奥さま(госпожа, дама)」というロシア革命前の言葉遣いが適用されることもあったため、「マダム」はそのような文脈とも考えられる。ロシア文学研究者・越野剛氏(慶應義塾大学)のご教示による。

20-22	昼食後、みなで壁を塗る。夜、帰宅した夫は社会主義の到来した後の社会について桂蘭に説く。	(原作も同様)
		桂蘭はソ連の隣人たちから物をもらわないように気を遣い、息子の安生にも厳しく言い含めていた。しかし隣人たちが親切なので、桂蘭はお礼にニーナに餃子を届ける (18 頁)。連環画では省略。
23-33	鞋をめぐる中ソ友好物語 (後述)。	(原作も同様)
		ソ連の奥さんたちが桂蘭に針仕事を習うようになり、ニーナは子供の帽子を編めるようになる (18-19 頁)。連環画では省略。
34-47	十月革命記念日、桂蘭が初めてニーナの家を訪れ、昼食に招かれる。ニーナの夫である軍医の少佐と娘ターシャ、彼らの中国の友人・李福厚とその息子・蘇生も参加する。	原作では、ニーナの家の豪華な様子を詳細に描写する。薄いブルーの天井、真っ白な壁紙、ぴかぴか光る金の縁飾り、真ん中に掛けられたスターリンの肖像、テーブルに並んだ小物と生花、磨き上げられた床板 (19 頁)。連環画では図像として表現される。連環画では、グーリヤが安生 (劉桂蘭の息子) を呼びに行く、原作にない場面を追加 (38 コマ)。
48-49	昼食後、ニーナはソ連の画報を桂蘭に見せ、ソ連のコルホーズや、ソ連の専門家が中国の国家建設を支援していることを説く。	原作ではニーナの母親がコルホーズの搾乳婦で労働英雄であること、革命前に三人の兄が餓死したことが語られ、桂蘭も日本に侵略された時代と現在の生活の違いを語る (20 頁)。連環画では省略。
50-52	ある日、ニーナは中学校でロシア語を教える仕事に就いたと桂蘭に告げる。桂蘭の娘・小荅はその学生となり、桂蘭とともにニーナに中国語を教えた。	(原作も同様)
53-55	翌年の十月革命記念日、小荅からニーナが特別休暇をもらえると聞いた桂蘭は、手料理を届ける。しかしニーナは休みをとらず、中国のために仕事に出かけていた。桂蘭は感銘を受ける。	(原作も同様)

56-59	桂蘭が引越ししてから五年経ち、中ソ友好月 ²⁰ が始まり、ソ連の隣人たちは桂蘭にきれいな服を着せて化粧をする。「交歓の夕べ」に参加した帰り道、桂蘭はニーナから帰国を告げられる。	(原作も同様)
60-62	桂蘭と小苓はニーナへの記念の品に、平和の鳩を刺繍した枕を作る。	(原作も同様)
63-64	別れの日、桂蘭は子供と学生たちと見送りに行く。ニーナはソ連の礼儀をもって桂蘭にキスをする。	原作には「劉桂蘭も思わずニーナにキスをしていた(劉桂蘭也不由得吻了妮娜)」という描写があるが(21 頁)、連環画ではこれを説明文から省略し、桂蘭がニーナにキスを返す場面を描く(63 コマ)。
65-72	帰宅すると、新しいソ連の奥さんが引越しして来た。少佐の見送りに間に合わなかった李福厚と蘇生は、贈り物のゆで卵を新入りのソ連の奥さんに渡す。桂蘭はグーリャと彼女の部屋の片づけを手伝う。	原作はソ連女性の話し言葉に「スパシーボ(絲巴西伯)」とロシア語を挿入し、末尾に「ありがとう(謝謝)」と注を付す(22 頁)。連環画にはない。

連環画『鄰居』は、中国女性の劉桂蘭と二人のソ連女性、とくにニーナとの交流を描く物語である。しかし、【図 5】の表紙を見ると、中央に大きく描かれているのは、桂蘭と彼女に酒を注ぐニーナの夫の少佐である。少佐の右側に横向きのニーナ、桂蘭の左側に後ろ姿のグーリャが描かれていると思しく、少なくとも、表紙においては、中ソの主婦同士の交流というテーマが前面に押し出されているとはいえない。

これについては、前述の通り、中ソ友好時期にソ連が「あにき」と呼ばれていたことを図像化したものと考えることができよう。ロシアでは酒を注ぐのは男性の役割であり、この表紙ではそうした行為からソ連人を「主」、中国人を「客」として描いている点も注目に値する。

少佐が桂蘭に注いでいる酒は、ワインのように見えるが、これは原作において、少佐がやはり桂蘭をワインでもてなす描写にもとづく。この絵が、当時の旅大市に駐留

²⁰ 原作および連環画は、劉桂蘭の引越し時期を 1949 年春とし、「中ソ友好月」をその五年後としているが、1952 年の「中ソ友好月」と時期が相違する。52 年以降、全国規模の「中ソ友好月」活動が行なわれた記録は、『人民日報』からは見いだせない。この時間差は、おそらくニーナの帰国を、ソ連軍の旅大市撤退の時期に合わせたために生じたのではないと思われる。しかし、新しいソ連人の奥さんが引越ししてくるという結末とも矛盾が生じるため、詳細は未詳である。

したソ連人の日常をいかほど反映しているのかは、よくわからない。あるいは、このあたりの描写には、当時の中国人の想像上の「ソ連」イメージが反映されているのかもしれない。作中に登場するソ連人の名前（前掲注 15）や、原作におけるロシア語の使い方（前掲注 19）と同様、必ずしも正確な理解にもとづいているとはかぎらず、絵師の想像した「ソ連」の風景ととらえるべきであろう。

連環画『蘇聯媽媽』について

次に、もう一つの連環画『蘇聯媽媽（ソ連のママ）』²¹について、あらすじ²²を紹介する。【図 7】下線部は、後述する 1950 年代の「中ソの母子物語」に重複して見られるエピソードである。

1945 年 9 月、赤軍（原文は「苏联紅軍」）は旅順と大連を解放した。だが翌年、蒋介石一味（原文は「蒋介石匪帮」）が海を封鎖したため、漁民の息子・閻寿明は、父が砂浜で掘ったシジミの行商に出ることとなった。寿明は、丘の上に住むソ連女性（名前は「瑪麗・リージュンチャイワ柴娃」、以下「ソ連のママ（苏联媽媽）」）の家を訪ねる。ソ連のママは、大きなパンをくれた。寿明は彼女の息子カリク（加里克）と遊び、夕食を食べたのち、泊めてもらう。翌日、寿明の両親はソ連のママを訪ね、生活苦のため寿明を預ける。風呂に入り、新しい洋服に着替えた寿明は、鏡の前の自分が別人になったように思う（1-17 コマ）。【図 8】

翌年の春、カリクに誘われ、寿明は白玉山に遊びに行く。寿明はソ連のママに牛乳を取りに行く用事を頼まれていたが、帰宅したカリクは、牛乳はなかったと嘘をつき、寿明も黙っていた。その夜、ママは子供たちにレー



図 7『蘇聯媽媽』表紙



図 8『蘇聯媽媽』17 コマ

²¹ 張福高・叢白生原著、白芒改編、吳詒画、上海人民美術出版社、1958 年 2 月、全 74 コマ。確認できた現物は奥付部分の破損が激しいため、インターネット上の画像も参考にした。
http://book.kongfz.com/item_pic.do?shopId=22607&itemId=704470541&imgId=2 (2021 年 7 月 9 日確認)。

原著者の張福高は児童文学作家で、張甫、張翹、張静などの名も用いる。中国作家協会遼寧分会会員、大連市作家協会副主席、大連市政協常務委員兼提案委員会副主任。

<http://xuewen.cnki.net/R2006111480005659.html> (2021 年 7 月 9 日確認)。

²² この連環画には「内容紹介」がないため、筆者がまとめた。

ニンの話を説く。幼年時代のレーニンが、ガラスの瓶を割ったことを正直に告白した話を聞き、カリクは嘘をついたことを認める。ソ連のママは、カリクと寿明に嘘をつくことを戒めた (18-34 コマ)。【図 9】²³



図 9 『蘇聯媽媽』 31 コマ

秋、寿明はカリクの通うソ連五号中学の近くの、中国の小学校に通うことになった。ある日、帰宅した寿明は庭の鉄棒から落ち、ソ連のママが呼んだ海軍医院の救急車で運ばれる。車の振動を和らげるため、ママは寿明を抱きかかえた (35-41 コマ)。【図 10】

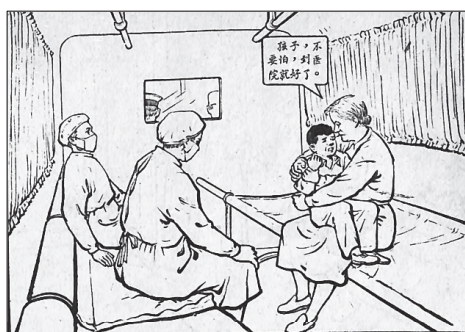


図 10 『蘇聯媽媽』 41 コマ

手術で骨をつなげた寿明は、隣の病床にいた海軍軍官イヴァーノフ（伊凡諾夫）から、戦闘の話を聞く。また、看護師のパーシャ（巴莎）に食事の世話をしてもらい、寿明はソ連の同志に感銘を受ける。見舞いにきたカリクは自分の作った木製の自動車の模型「モスクワ―北京」号²⁴を見せ、中ソ学生の交歓会で中国の友達に贈るのだと話す。仲睦まじい寿明とカリクを見て、イヴァーノフは中ソの偉大なる友好に思いを馳せる (42-49 コマ)。【図 11】

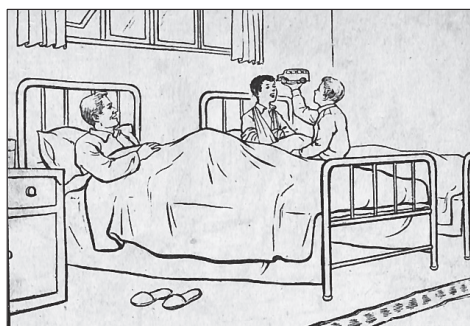


図 11 『蘇聯媽媽』 49 コマ

ひと月後、退院した寿明のために、ソ連のママは学校に補習を依頼する。ママは常に子供たちの成績帳（記分冊）を見て、4 点か 5 点をとるよう叱咤する。寿明が 2 点をとったとき、ママはソ連の英雄ゾーヤ²⁵が

²³ 図 9 の右下に見える文字は、「本を大切に 汚さないようにし 期限までに返しましょう（愛護書籍 勿使汚損 到期歸還）」というゴム印が押された痕である。図 35 も同様。

²⁴ 「モスクワ―北京」は、ヴァノ・ムラデーリ作曲、ミハイル・ヴェルシニン作詞による 1949 年の歌曲。中華人民共和国建国を記念し、スターリンと毛沢東による中ソ友好を謳った歌だが、スターリンの没後、歌詞の一部が書き換えられた。

²⁵ ゾーヤ・コスモデミヤンスカヤ (1923-1941) は、独ソ戦初期に活躍したソ連の女性パルチザンであり、死後、ソ連邦英雄の称号を与えられた。ゾーヤについては母親の回想記『ゾーヤとシェーラ』(邦訳はコスモデミヤンスカヤ著、赤松まり訳、青木書店、1952 年、上・下巻)があり、レオ・アルンシタム監督の映画『ゾーヤ』(1944、中国語題は『丹娘』)は中国でもよく知られ、連環画にもなっている。

算数を学んだ話を聞かせた。寿明は感動し、算数の勉強に取り組む (50-55 コマ)。【図 12】

第一次五カ年計画²⁶が始まった。寿明の父や兄も労働者となり、寿明は日曜にはソ連のママとカリクを実家に連れて行った。寿明が小学校を卒業すると、高級小学校通学のため、父親は彼を家に戻した。別れのとき、ソ連のママは寿明に、毛沢東のよき隊員

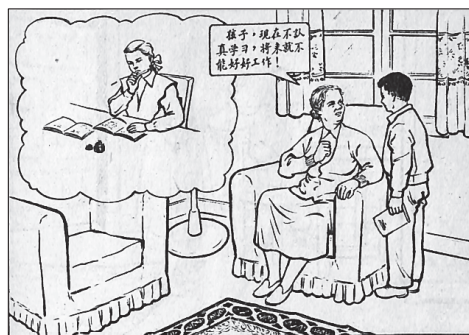


図 12 『蘇聯媽媽』 53 コマ

になるように、と告げる。寿明は算数の 2 点を向上させるため、二週間ママに会いに行くのをやめて補習に励んだ。心配して会いに来たママに、寿明は成績帳を見せ、少年先鋒隊に入隊申請したと告げる (56-63 コマ)。

寿明の申請は受理され、入隊式の日が来た。親たちの見守る中、新隊員の子供たちは紅いネッカチーフを襟元に巻いてもらう。式典の後で、スピーチを請われたソ連のママは、家長を代表して子供たちを激励する。寿明はかつてを思って涙を流し、子供たちはママを囲んで、歌い、踊るのだった (64-74 コマ)。

この物語は実話にもとづいており、モデルとなる人物の体験が短編小説に書かれ、連環画化されたのち、複数の類話とエピソードを共有しながら、ふたたびリライトされるという複雑な経緯をたどっている。以下、この連環画を中心とする「中ソの母子物語」の改編と変遷について、関連する小説も含めて見ていきたい。

実話から原作小説へ

2015 年の『大連晩報』の記事²⁷によれば、大連在住の李秀華なる 72 歳の老婦人が、新聞社に長編の手記を持参した。それは彼女の夫の少年時代の話であった。彼女が手記を書いたのは、新聞紙上でコラムを見かけたことが発端である。とある連環画収集家が、中ソ友好宣伝のための小冊子を見つけ、その中の一篇「一個少先隊員的成長 (ある少年先鋒隊員の成長)」に目をとめた。それは、8 歳の少年・閻寿明が「ソ連のママ」に教育される実話にもとづいていた。収集家はこの話題を新聞社に提供し、2014 年、「閻寿明、どこにいるの? (閻寿明、你在哪裡)」という小さなコラムが新聞に掲載されたのだ。

²⁶ 1928 年にソ連で発表された第一次五カ年計画を模範とし、中国において 1953 年 6 月に開始された計画で、工業化と農業の集団化をめざした。ソ連の技術と資金の援助により、57 年までに急速な重工業の重点化と農業の集団化が進められた。

²⁷ 周媛「大連古稀大媽手写兩万字 記述老伴兒少年往事」『大連晩報』2015 年 3 月 29 日による。
<https://ln.qq.com/a/20150329/007346.htm> (2021 年 7 月 9 日確認)。

閻寿明は、李秀華の連れ合いであった。報道の後、多くの人が話を聞きに来たが、古希を迎える閻寿明は、長年病を患っていたこともあり、その語りには筋道がなく、李秀華は自身が整理することにした。閻寿明の原籍は山東省で、父は旅順に渡り、車夫をしていた。寿明は旅順に駐屯していたソ連軍の居留地で、50代のソ連女性と出会い、彼女の死んだ息子に面影が似ていたため、その家に引き取られて家族のように過ごした。1955年にソ連軍が旅大市から撤退する際、ソ連の「家族」たちと別れたが、その後、「ソ連のママ」の夫である「パパ」のように、海軍の士兵になった。李秀華が知り合ったとき、彼はもはや除隊した青年であったが、たまにいくつかの不完全なロシア語の単語を話し、スプーンで食事をする習慣があり、ソ連の家庭で育った名残を見せたという。

以上は記事のあらましが、ここに登場する「一個少先隊員の成長」²⁸とは、1955年に出版された『難忘的十年 流伝在旅大的中蘇友誼故事（忘れがたき十年旅大に伝わる中ソ友誼の物語）』という小冊子に収録された、一篇の短編小説である。【図13】

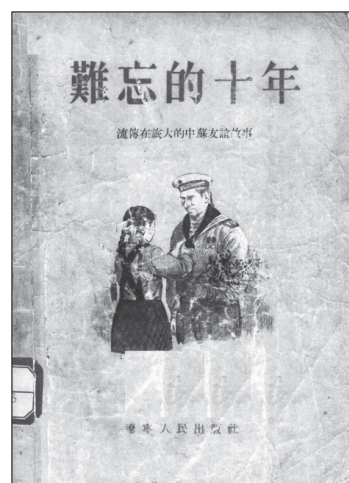


図13『難忘的十年』表紙

この小説を原作として改編したのが、1958年の連環画『蘇聯媽媽』であり、その後、同じ物語が、1959年に張翹著、顔梅華・韓敏絵図『李明和他的蘇聯媽媽（李明と彼のソ連のママ）』²⁹というタイトルでリライトされたと考えられる。なお、張翹とは、「一個少先隊員の成長」の著者・張福高の別名である。

興味深いことに、「中国の子供とソ連の義理の母」という組み合わせの物語は、同時期のほかの小説にも散見される。その一つが、連環画『鄰居』の原作者・王星によるもので、1954年に発表された「親愛的媽媽（親愛なるママ）」³⁰という短編小説である。また、主人公が少年ではなく少女というパターンの物語に、1958年に出版された張瓊の小説『蘇聯媽媽（ソ連のママ）』³¹がある。

いずれも似たような題材と題名の作品なので、ここでは以下のように丸数字を付し、比較してみたい。比較の際、それぞれに繰り返しあらわれるエピソードに着目し、抜き出していくとともに、①と④については、連環画との違いについても見ていく。

²⁸ 張福高・叢白生「一個少先隊員の成長」旅大人民日報中蘇友誼徵文編輯小組編、隋軍・郭毅等挿図『難忘的十年 流伝在旅大的中蘇友誼故事』遼寧人民出版社、1955年7月、45-59頁。

²⁹ 張翹著、顔梅華・韓敏絵図『李明和他的蘇聯媽媽』少年儿童出版社、1959年5月、全74頁。

³⁰ 王星「親愛的媽媽」『文学叢刊』第2期、1955年、56-72頁（『旅大文芸』1954年12月号より転載）。

³¹ 張瓊『蘇聯媽媽』上海文藝出版社、1958年11月、全34頁。

- ① 張福高・叢白生「一個少先隊員的成長」(1955、連環画『蘇聯媽媽』の原作小説)
- ② 王星の短編小説「親愛的媽媽」(1954)
- ③ 張瓊の小説『蘇聯媽媽』(1958)
- ④ 張翹(張福高)の小説『李明和他的蘇聯媽媽』(1959、①のリライト)

中ソの母子物語

- ① 連環画の原作小説「一個少先隊員的成長」(1955)

【図 14・15】

あらすじは連環画『蘇聯媽媽』とほぼ同様である。前述した 1950 年代の「中ソの母子物語」に重複して見られるエピソードは、すべて原作に描かれている。以下、同様に、1950 年代の「中ソの母子物語」との共通点については下線で示す。

連環画との相違点としては、冒頭に、旅順の小学校で少年先鋒隊の入隊式が行なわれ、子供たちが紅いネッカチーフを襟元に巻いてもらう情景を描いてから、回想に入る点があげられる。また、主人公の閻寿明は、ソ連人の家庭では「ペーチャ（別佳）」と名づけられる。原作では、ソ連人と寿明がいかにして意思の疎通をはかったかという点も細かい描写がなされ、近所づきあいを好むソ連のママが、中国に来てから一年も経たないうちに、手ぶりをつけながらの中国語をある程度話すことが述べられている。寿明の語学力については、ソ連人の家庭に二年預けられる間に、日常会話はある程度わかるようになったが、カリクの通うソ連五号中学の授業にはついていけず、中国の小学校に転校するというエピソードが描かれ、このくだりは連環画では省略されている。

原作小説には、連環画では省略されたソ連作品の引用も見られる。たとえば、ソ連の海軍医院に入院した閻寿明は、イヴァーノフとともに院内にある映画放映室で、ソ連映画『マキシムカ』³²を見る。彼は黒人少年を救うロシ



図 14 「一個少先隊員的成長」 51 頁



図 15 「一個少先隊員的成長」 58 頁

³² ウラジーミル・ブラウン監督、1952 年のソ連映画。1864 年、ロシア海軍の船によって、アメリカの奴隷船から救出された黒人少年が、乗組員と友情を育み、ロシア艦隊の一員となる物語。中国では中央電影局東北電影制片廠により、1953 年に中国語吹替版『黒孩子（馬克西姆卡）』が作られた。

アの水夫を、ソ連のママやイヴァーノフに重ね合わせ、ソ連の同志に感銘を受けるのである。また、物語の最後に、少年先鋒隊の入隊式でソ連のママがスピーチをする点は連環画と同じだが、子供たちがママを囲んで、歌い、踊る場面において、「モスクワ—北京」という具体的な曲名が示されている。この曲名は、連環画の同場面では触れられないが、【図 11】でカリクが寿明に見せる自動車の模型に、同じ名前がつけられている。

② 王星「親愛的媽媽」(1954)

語り手の私（名前は「王星」）が、かつて（1948 年）旅順の被服工場で働いていた際、工場長でソ連高官夫人のパヴロワ（巴芙羅娃）という女性に、我が子のように愛されたことを回想する物語である。私は両親と死別した孤児であり、パヴロワの二人の息子は中国東北部を解放するために戦死している。以下のいくつかのエピソードが、1950 年代の「中ソの母子物語」に共通する要素である。

- ・パヴロワが私の服を着替えさせ、私は鏡を見て、立派になった自分の姿に驚く（64 頁）。

- ・パヴロワが私に、共産主義青年団に入ったかと尋ねる。パヴロワは、自分の二人の息子が共産主義青年団員だったと話し、私は入団を決意する。その後、ついに入団を批准された私に、パヴロワは息子の形見である共産主義青年団の徽章を与え、私の頭にキスをした（64 頁）。

- ・病気になる私を、パヴロワがソ連の軍医に診せ、病院に連れて行く。車の中で、パヴロワは私をしっかり抱えていてくれた。虫垂炎と診断された私は、手術を受ける。パヴロワは病床の私に牛乳を飲ませてくれた（65-66 頁）。

- ・私は工場から大連の工農中学³³に派遣されることに決まった。二ヶ月に一度は会いに行く約束した私に、パヴロワは毎回「成績簿（記分簿）」を持ってくるよう要求する。しかし、私の成績は 2 点か 3 点にとどまり、私はパヴロワに会っても成績簿を忘れたふりをしていた。パヴロワは、息子のアリョーシャ（阿廖莎）が嘘をついた話をし、嘘をついてはいけないと戒める（67-70 頁）。

- ・パヴロワが帰国命令を受けた。大連駅に見送りに来るように、とのパヴロワからの連絡を受け、私は中国の骨董が好きだった彼女のために、象牙で彫られた「白菜とキ

³³ 工農速成中学を指す。工業および農業労働者の専門的人材を育成するため、1950 年 4 月から 6 月にかけて北京、瀋陽、大連、ハルビン、太原、保定、西安、蘭州、無錫などに創設された。修業年限を 3 年とし（1956 年より 4 年となる）、学生は各機関、工場、学校から計画的に選抜された。1955 年、全国の学生募集を停止し、東北農学院附設工農速成中学の場合、最後の卒業生を送り出したのち、1958 年にチチハル師範学院に改組された。董玉良・宋鎮修・郭燕主編『難忘的歲月』黒龍江人民出版社、1996 年、1-18 頁。

リギリス（白菜蠅蠅）」を買い求めた。パヴロワに贈り物を渡すと、彼女は私の頭にキスをする。別れ際、パヴロワは私の頬にも力を込めてキスをし、私も彼女の皺の刻まれた頬にキスを返した（71-72 頁）。

③ 張瓊『蘇聯媽媽』（1958）【図 16】

馬蓮花という 15 歳の少女の一人称で語られる小説である。冒頭で、乳飲み児の娘・蘇華を抱いた私（大人になった馬蓮花）は、十年間生活を共にしたソ連のママを見送る。大連駅では、「モスクワ—北京」の歌声が流れる。その後、回想に入り、1947 年冬、瀋陽から逃げる途中、「国民党反動派」に父、祖母、母を撃たれ、孤児となった私が、ソ連人夫婦に救われる物語が始まる。1950 年代の「中ソの母子物語」との共通点は、以下の通りである。

・私はソ連のママであるパニヤ（巴尼亞）、その夫のブブノフ（布布諾夫）、娘のニーナ（妮娜）という一家の一員となり、マリワ（瑪麗娃）と名づけられる（2-8 頁）。

・私はソ連軍の病院で手当てを受け、国民党反動派がアメリカの銃弾によって撃った自分の肩の傷を、ソ連のママがソ連軍の病院で治してくれたと感じる。私はソ連のママからロシア語や算数を学び、ソ連の画報や共産党、劉胡蘭³⁴にまつわる本を与えられる。その後、私は急性腹膜炎を患うが、ソ連軍の病院で手術を受けて回復する。手術の際、血液が足りず、ソ連のママは自らの血液を輸血し、病床の私にキスをする。妹となったニーナは、汽車や飛行機の模型を持って見舞いにきてくれた（8-12 頁）。

・ソ連のママは工場の計画技師であり、半年後、私も工場の統計員となる。ある日、月計表の統計を間違えた私は、そのことをママに隠すが、ママは私の態度を厳しく戒める（14-15 頁）。

・成長した私は、新設の計画訓練班で、教師であるソ連のママの通訳をつとめるまでになる。ママの講義原稿の翻訳に迫られる私は、同僚の王健同志にも手伝ってもらう。友情が深まるうちに、彼の父が「日本鬼子」に殺されたことを知る（22-30 頁）。

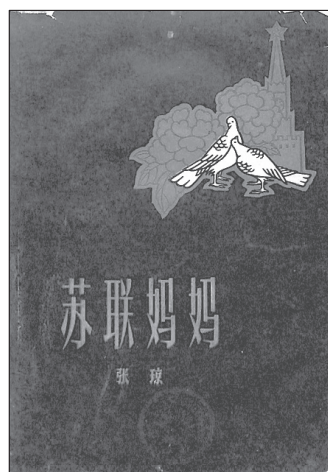


図 16 『蘇聯媽媽』表紙

³⁴ 劉胡蘭（1932-1947）は、山西省文水県雲周村の農民女性。45 年に共産党の婦女幹部訓練班に参加、46 年に遊撃戦に従軍し、47 年、軍閥の閻錫山指揮下の国民党軍に捕縛され、自白と変節を拒否したため惨殺される。死後まもなく「人民的英雄」と報道され、同年、共産党員として追認された。劉胡蘭の死は「中国のゾーヤ」と称され、47 年に演劇化され、翌年には歌劇が上演された。中華人民共和国建国後にも歌劇の新作が作られ、女性英雄として宣伝された。関浩志「英雄の形象化とその変容——新中国成立前後の劉胡蘭像を中心に」『中国：社会と文化』20 号、257-271 頁による。

・同僚の間で私と王健の恋愛が噂になると、ママは王健を家に招き、パパとともに二人の仲人を買って出る。私と王健は婚約し、ママの影響で階級の自覚を高め、工場で最初の入団大会が行なわれた際、二人とも中国新民主主義青年団に入団した。翌年、私は中国共産党に入党し、その日ソ連のママは、一番素晴らしい洋食を準備し、友人を招いて記念写真を撮り、祝ってくれた (30-34 頁)。

④ 張翹『李明和他的蘇聯媽媽』(1959)【図 17】

連環画『蘇聯媽媽』の原著者・張福高による小説で、①のリライトと考えられる。①および連環画に比べ、エピソードがかなりふくらまされ、後日談が付け加えられている。以下、連環画との相違点を中心に、あらすじを示す。

・雪の中、サザエを売る少年・李明は、ソ連の友人・カリク（加里克）と出会う。李明はカリクと遊び、画報を見せてもらうのが好きだった。カリクの家に行くと、ソ連のママ（名前は「^{マルーチャイワ}瑪露柴娃」）がストーブにあたらせ、焼いたパンを食べさせてくれた。漁師をしていた李明の父が、国民党の軍艦によって船ごと海に沈められ、李明が孤児であることを聞くと、ママは李明と一緒に住まわせる (1-6 頁)。

・李明の回想。彼の脚には、かつて「日本鬼子」の犬に噛まれた古傷がある。1945 年 8 月、赤軍がやって来て日本鬼子は捕まり、日本軍に取り上げられていた父の船も返された。【図 18】ソ連の子供たちの釣りを手伝ったことで、李明は彼らと友人になる。李明はロシア語を覚え、ソ連の子供たちも中国語を覚えた。その後、蔣一味（原文は「蔣匪」）が旅大を封鎖するとの噂が流れ、李明の父が蔣一味の軍艦のせいで死ぬと、李明は孤児となった (6-19 頁)。

・ママ（原文は「大娘」）は李明にカリクの服を着せ、鏡を見せる。【図 19】ママは中国人と近所づきあいをするのが好きで、旅順に来て半年で中国語をかなり覚



図 17『李明和他的蘇聯媽媽』表紙



図 18『李明和他的蘇聯媽媽』14 頁



図 19『李明和他的蘇聯媽媽』21 頁

えた。李明は、カリクの提案で「ペーチャ（別佳）」と名づけられた（20-23 頁）。

・ある日、カリクとペーチャはパチンコで雀を打ち落とそうとして、窓ガラスを割ってしまう。ママはガラスを作るのにどれだけの労働者の手がかけているかを子供たちに諭した（23-27 頁）。

・ペーチャは 8 歳になり、地元の小学校に入学した。学校で喧嘩をして帰宅したペーチャに、ママは赤軍の兵士が中国を助けて日本鬼子を追い払った話をして、助け合うことの大切さを説く（34-36 頁）。

・ペーチャは木から落ちて肘を脱臼した。ソ連のママは海軍医院の救急車を呼び、医師に関節をつなげてもらったペーチャは、看護師のパーシャ（巴莎）や、同室の病床にいた軍官イヴァーノフ（伊凡諾夫）の世話になる。【図 20】イヴァーノフは、医院の映画放映室

に、映画『マキシムカ』を見に連れて行ってくれた。ペーチャはアメリカの奴隷商人を日本鬼子に、黒人少年を救うロシアの水夫をソ連のママやイヴァーノフに重ね合わせ、ソ連の同志に感銘を受ける（36-43 頁）。

・ペーチャは退院した。百貨店で、ゼンマイで動く自動車の模型を見たカリクとペーチャは、家のゼンマイ式目覚まし時計を分解し、壊してしまう。カリクが、自作の木製自動車を動かすために時計を分解したことを話すと、パパとママは叱らず、百貨店の動く自動車と、中古のゼンマイをプレゼントしてくれた（43-50 頁）。【図 21】

・ママは毎週土曜に子供たちの成績帳（記分冊）を見て、4 点か 5 点をとるよう叱咤する。さらに、ソ連の英雄ゾーヤ、グーリヤ（古麗亞）、オレグ（奥列格）³⁵が子供のころに勉強した物語を話す（52-55 頁）。



図 20『李明和他的蘇聯媽媽』38 頁

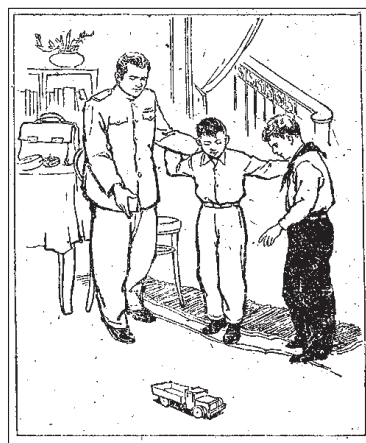


図 21『李明和他的蘇聯媽媽』51 頁

³⁵ ゾーヤについては前掲注 25。グーリヤはエレナ・イリイナ作の小説『第四の高さ』（1946）の主人公で、独ソ戦においてスターリングラードで戦い、犠牲になった元女優の英雄。中国では翻訳『古麗雅的道路』として知られる。なお、グーリヤは主人公の幼少期のあだ名であり、一般的な名前ではないが、連環画『鄰居』に登場するソ連女性の名はこの作品に由来すると思われる。越野剛氏のご教示による。オレグはアレクサンドル・ファジェーエフ作の小説『若き親衛隊』（1946）の登場人物。独ソ戦において地下組織を結成した青年たちの活躍を描く後者は、ゲラシモフにより 1948 年に映画化され、中国でも 1954 年に翻訳『青年近衛軍』が出版、連環画にもなっている。

・ソ連のママは常に、毛沢東のよい子になり、少年先鋒隊の隊員になるように、と説いた。パーチャの入隊式の日、新隊員の子供たちは紅いネッカチーフを襟元に巻いてもらう。式典の後のスピーチで、ソ連のママは家長を代表して子供たちを激励する。拡声器から「モスクワ—北京」の歌声が流れ、子供たちはママを囲んで、歌い、踊った（55-59 頁）。

・後日談。パーチャは中学生になり、学校に寄宿するようになった。ソ連のママは、カリクのように、早く青年団に入団するよう告げる。パーチャはママに成績帳を見せ、すでに入団申請を済ませ、団の学習に参加していると告げる（60-63 頁）。

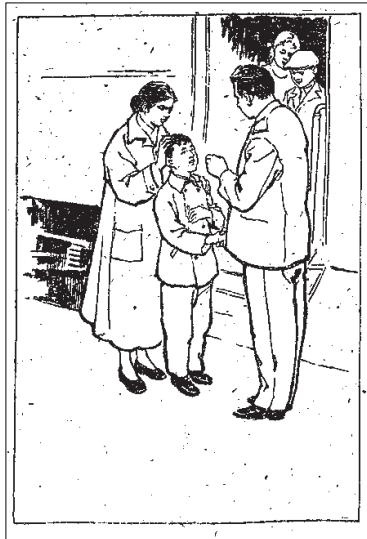


図 22 『李明和他的蘇聯媽媽』 70 頁

・「中蘇会谈公報」³⁶が発表され、1955 年 5 月末までにソ連軍は旅大市を離れることになった。最後の日曜日、中国とソ連の学生が西山坡に登り、「中蘇友誼林」の植林活動を行なった。パーチャはママたちを大連まで送った。大連駅で、パパはパーチャにキスをし、ママは最後に、「青年団員になりなさい」という言葉を残した（63-71 頁）。【図 22】

・二週間後、パーチャはモスクワからの手紙を受け取った。パーチャも返信を書き、入団が批准され、団員となったことを告げた。手紙を出しに行ったパーチャは、郵便局の隣の花園に立つ、ソ連軍兵士の銅像を見た。パーチャは、モスクワのパパとカリクを思い、自分も将来このような人になるのだと決意する（72-74 頁）。

原作である①および連環画との相違点として、主人公の名前が実話にもとづく「閻寿明」から「李明」となり、孤児という設定に変えられている。孤児となった原因は、国民党の軍艦によって父が船ごと沈められたというものだが、ここには、③の主人公が「国民党反動派」に父、祖母、母を撃たれ、孤児となった設定との類似性を見いだすことができよう。主人公がソ連の「家族」からソ連風の名前を与えられるという要素も、①や連環画にはなかったものであり、③のような物語の影響を受けて、書き換えがなされたのかもしれない。

また、③において、主人公の同僚・王健同志の背景として語られていた「日本鬼子」への恨みが、④では李明自身の回想として描かれる。このエピソードが加えられるこ

³⁶ 1954 年 10 月、中華人民共和国建国五周年祝賀のために訪中したフルシチョフらソ連政府代表団は、毛沢東、周恩来らと会談を行ない、中ソが共同使用していた旅順口海軍根拠地からソ連軍が撤退することに合意、公表した。『人民日報』「中蘇關於蘇聯軍隊自共同使用的中国旅順口海軍根拠地 撤退並將該根拠地交由中華人民共和国完全支配的聯合公報」1954 年 10 月 12 日第一版「無比深厚的偉大友誼」1954 年 10 月 13 日第一版。

とにより、中国とソ連の協力が日本軍を撤退させたというテーマが強調されているといえるだろう。

また、連環画『蘇聯媽媽』や②および③では、中国人とソ連人は、初対面時からいきなり会話を成立させているように見える。それらに比べると、④では、ソ連のママが中国語を解し、中国人の少年もある程度ロシア語を話すといったように、言語による意思疎通の描写について、読者が違和感を抱かないような説明がなされている。

注目したいのは、後日談にあたる締めくくりの場面である。この小説は、「中ソの母子物語」に連なることは間違いない内容であるにもかかわらず、別れ際に李明にキスをするのはパパである。李明もまた、最後には、ソ連軍の兵士であるパパのような人間になりたいと願う。「中ソの母子物語」の主人公である少年は、1959年の④に至ると、ママの懷から離れ、パパをめざすようになる。このことと、主人公が少女である③の結末が、王健同志との結婚、入党、「蘇華」なる娘の出産であることを比較すると、ソ連のママに育てられた中国の男女がたどる「理想的」な将来像の違いには、1950年代の中国のジェンダー観が反映されていると考えられよう。

ここまでのところでは、中国人とソ連人が隣人として交際する、あるいは擬似的な家族関係を形成する物語を取り上げ、複数の物語に共通するエピソードが見られることを確認してきた。そのうちいくつかの要素は、物語が連環画化される際、中国人にとっての「ソ連」イメージをあらわすものとして、図像で表現されている。次に、そうした視覚化されたソ連のイメージを見ていきたい。

連環画に描かれるソ連のイメージ

★パン

中ソ友好連環画において、共通して描かれるソ連のイメージに着目する際、まず取り上げるべきはパンであろう³⁷。連環画『鄰居』では、劉桂蘭の引越しの片づけを突然手伝いに来た二人のソ連女性が、昼食時に手料理とともに「大きなパン（大面包）」を運んでくる。このパンが、本当に大きい。【図 23】

ちなみに手料理の全容は、「野菜スープ（ボルシチ？）、揚げた牛肉（カトリエータ？）、キュウリのピクルス、大きなパン、熱い紅茶（一鍋菜湯，一盤炸牛肉，一盤酸黃瓜，一个大面包，一壺熱紅茶）」と説明文で描写される。

³⁷ 中国人のソ連イメージにおける「パン」および「キス」については、越野剛「接吻と白鳥とソ連映画——『1918年のレーニン』の中国における受容」『連環画研究』第8号、2019年に詳しい。映画『1918年のレーニン』（1939）には、ソ連人夫妻がキスを交わしながら食糧不足について会話をし、夫が「パンは手に入るよ（面包会有的）」と妻を励ます場面がある。この場面は、同作の中国語吹替版が1951年に上海電影訳制廠で制作されて以来、人口に膾炙し、中国人のソ連イメージ形成に大きな影響を与えた。前掲注2 田村容子・越野剛「中国映画における『白鳥の湖』の受容と変奏」も参照されたい。



図 23 『鄰居』 17 コマ

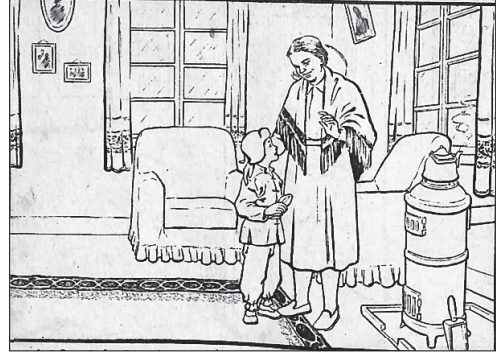


図 24 『蘇聯媽媽』 8 コマ

『蘇聯媽媽』では、雪の中、シジミを売りに来た閻寿明を迎え入れたソ連のママが、彼をストーブの前に連れて行き、「大きなパン（大面包）」を手渡す。【図 24】

パンと同様に、ソ連人を描く際によく使われる食品として、牛乳もあげておきたい。連環画『蘇聯媽媽』および①や④では、主人公がソ連のママに嘘をつくきっかけとして、牛乳を取りに行く用事を依頼されている。また、②でも、手術後の私にママが牛乳を飲ませてくれる場面が描かれる。いずれも、貧困であつたり、孤児であつたりする中国の子供に、高価な栄養品が与えられるという意味を含むのであろう。

★キス

連環画『鄰居』では、友人となった劉桂蘭とニーナが、別れ際にキスを交わす場面が描かれる。先に述べた通り、原作には「劉桂蘭も思わずニーナにキスをしていた（劉桂蘭也不由得吻了妮娜）」という描写があるが、連環画ではこの部分を説明文から省略し、桂蘭がニーナにキスを返す場面を描く。【図 25】



図 25 『鄰居』 63 コマ

抱き合う二人の女性はややぎこちなく、説明文がなければ、単に耳打ちをしているだけのようにも見える。この図像がキスシーンであるという説得力を与えるのは、桂蘭の後頭部に添えられた、ニーナの右手であろう。読者にその真意が伝わったかは不明だが、絵師の苦心が感じられる。

そもそも、連環画における抱擁やキスの場面は珍しいが、1956 年の作品で、ソ連女性と中国女性の友情という文脈のもとでは、視覚化することが許されたのかもしれない³⁸。なお、1958 年の連環画『蘇聯媽媽』のほうでは、キスシーンは説明文におい

³⁸ 文化大革命後、1979 年においても、映画におけるキスシーンの公開は議論的であった。理

ても図像においても描かれない。

一方、小説である②や③では、感極まったソ連女性の愛情表現として、キスすることがしばしば描写されている。②の私とパヴロワの別れ際のキスシーンは、一見、連環画『鄰居』とよく似ているが、中国の男性とソ連の女性の間で交わされている点が異なる。この場面において、パヴロワの頬に対し、「私も力を込めて、彼女の慈悲深く皺の刻まれた頬にキスをした（我也用力吻了她那慈祥而多紋的臉腮）」と描かれるのは、私とパヴロワの間に 10 代後半と 40 代後半という年齢差があり、異性間の性的な愛情ではないことを強調するための処理なのではなかろうか。

また、④では、先に述べたように、別れ際に中国の少年・李明にキスをするのは、ソ連のママではなく、パパとなっている。1959 年の同作では、たとえ中ソの友好を示すキスシーンであっても、異性間の性愛を連想させる描写を忌避する配慮が働いたのかもしれない。

★肖像画

連環画『鄰居』では、原作で詳細に説明されるニーナの室内の異国情緒あふれる調度品が、図像であらわされている。中でも、スターリンの肖像画は、劉桂蘭が手料理を届ける場面においてはっきりと描かれている。【図 26】

連環画『蘇聯媽媽』では、レーニンの肖像画が居間に飾られており、家族が食卓を囲む場面においてしばしば登場する。とりわけ、ソ連のママが嘘をついた息子のカリクと閻寿明を戒めるため、レーニンの幼年時代の話をする際には、画面中央上段から、レーニンが一家を見守るような構図で描きこまれている。【図 27】



図 26 『鄰居』54 コマ

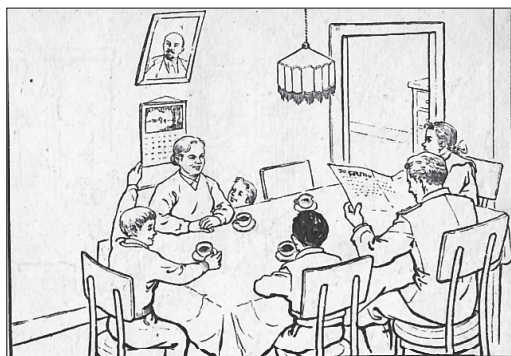


図 27 『蘇聯媽媽』29 コマ

また、④の挿絵では、李明がソ連のママにカリクの服を着せてもらい、「ソ連の子」

由は政治的なものというより、中国の観客が適応できないことが懸念されたためである。詳しくは越野剛・田村容子「連環画の中のソ連幻想——女性兵士の物語『朝焼けは静かなれど』」『連環画研究』第7号、2018年を参照されたい。

に変身する場面において、壁にレーニンの肖像画が描かれている（前掲【図 19】）。ところが、連環画の原作である①では、ソ連のママが幼年時代のレーニンの話によって嘘を戒める場面に置かれている挿絵に、レーニンの肖像画は見あたらない（前掲【図 14】）。したがって④にあらわれた肖像画は、連環画を参照した可能性も考えられる。

1956 年の『鄰居』ではスターリンであった肖像画が、1958 年の『蘇聯媽媽』ではレーニンとなっているのは、56 年のフルシチョフによるスターリン批判が影響を与えているのかもしれない。また、中ソ関係は、同年にフルシチョフが西側との平和共存をめざしたあたりから微妙なものになっていくので、裏切り者の「蘇修」ではない、正しい社会主義の象徴としてレーニンが掲げられたとも考えられる。

肖像画の描き方として興味深いのは、連環画『蘇聯媽媽』において、寿明の少年先鋒隊の入隊式の後、ソ連のママがスピーチをする場面である。ソ連のママは毛沢東の肖像画の前に立ち、それに覆いかぶさるような位置で子供たちに向かって語りかけている。彼女の身ぶりも、自身が指導者に成り代わっているかのように見える。【図 28】



図 28 『蘇聯媽媽』72 コマ

連環画、①、④のいずれにおいても、ソ連のママは毛沢東のことを「毛沢東」と呼び、「毛主席」と呼ぶような描き方はされていない。ソ連女性を毛主席と同等の立ち位置に置くこともまた、1950 年代の中ソ友好連環画ゆえに、許されていたことなのかもしれない。

★画報と模型

中ソ友好連環画では、中国人がソ連文化に触れる光景を描く際、画報と模型が小道具としてしばしば用いられる。連環画『鄰居』には、ニーナの家で昼食に招かれた劉桂蘭が、ソ連の画報を見せてもらう場面がある。【図 29】

フキダシのセリフで、ニーナは、「見て、これはトラクター、これは発電所、牛乳をしぼるのも電動化されていま



図 29 『鄰居』48 コマ

す！あなたがた中国も、そのうち私たちのようになりますよ！（瞧！这是拖拉机，这是发电站，挤牛奶也电气化啦！你们中国慢慢的就跟我们一样了！）」と述べている³⁹。

説明文には、ここで二人が読んでいるのは「ソ連の画報（苏联画報）」とあるのだが、桂蘭が手にしている画報には、キリル文字ではなく、漢字で「蘇聯」の二文字が書かれている。これは、『蘇聯』あるいは『蘇聯画報』と題された、中国語訳されたソ連のグラフ誌ではないかと考えられる⁴⁰。この一コマには、窓際のカーテン、ニーナの袖口、植木の下敷物と、あらゆるところにレースやフリルの描写が見られ、絵師と読者の間に共有されていたであろう「ソ連」イメージを感じ取ることができる。

連環画『蘇聯媽媽』でも、ソ連のママの家で閻寿明とカリクらソ連の子供たちが遊ぶ場面で、子供向けの読み物や絵葉書を見る様子が描かれる。【図 30・31】

小説③および④にも、中国人の子供がソ連人に画報を見せてもらう場面があり、画報は彼らがソ連に憧れるきっかけを作り出している。



図 30 『蘇聯媽媽』 11 コマ



図 31 『蘇聯媽媽』 18 コマ

また、【図 30】では、カリクと寿明の遊び道具の一つとして、ラジオのような機械が描かれている。こうした、ソ連の機械や模型への関心も、中ソ友好連環画や小説に共通して見られる要素であり、前掲【図 11】に示した通り、入院中の寿明を見舞いにきたカリクは、「モスクワ—北京」号と名づけられた手製の自動車の模型を見せている。

同様の場面は、小説の③および④にも見られる。④においては、模型を作るエピソードがさらにふくらまされ、ゼンマイを使った動く自動車を作るために、ソ連人の家庭にあったゼンマイ式目覚まし時計を分解し、壊してしまうというプロットに発展していた。これらの要素は、中国の子供が算数を学ぶことの意義を強調する内容とも結

³⁹ 1950 年代の中国のポスター、連環画の重要な画題として「トラクター」があり、それらがソ連の技術・経済支援およびソ連映画の影響下にあることは、前掲注 3 武田雅哉「よい熊さん わるい熊さん」に指摘がある。

⁴⁰ この雑誌は、『ソビエト連邦（Советский Союз）』というグラフ誌の中国語版である可能性が考えられる。同誌は 1930 年から 1991 年までモスクワで発行され、各国語版が作られた。日本では、駐日ソ連大使館広報部により『今日のソ連邦』というタイトルで発行された。

びつき、ソ連の科学や工業を宣伝する意図があったことをうかがわせる。

★少年先鋒隊と共産主義青年団

中ソ友好連環画と小説に共通するエピソードとして、ソ連のママが中国の子供に「少年先鋒隊」あるいは「共産主義青年団」（前身は「新民主主義青年団」）への加入を勧めるというものがある。

「少年先鋒隊」とは、中国共産党の全国的な青少年組織であり、ソ連のピオネールに相当した。また、「共産主義青年団」とは、中国共産党の指導下において、青年が共産主義を学ぶための組織であり、「少年先鋒隊」はその下部組織である。「少年先鋒隊」から「共産主義青年団」を経て、中国共産党へ入党するというのが、高級幹部をめざす青少年の理想的なコースといえるだろう。

「少年先鋒隊」に入隊した子供たちは、「^{ホンリンジン}紅領巾」と呼ばれる紅いネッカチーフを襟元に巻く。連環画『蘇聯媽媽』の入隊式でも、指導員からネッカチーフを巻いてもらう様子が描かれる。【図 32】また、1954 年には、よく似た構図のポスターも作られている⁴¹。【図 33】

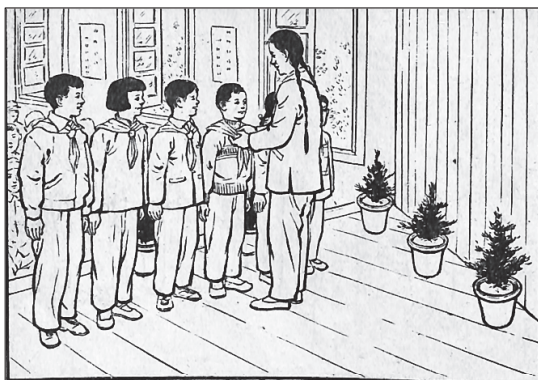


図 32 『蘇聯媽媽』 68 コマ



図 33 1954 年のポスター

★病院と手術

社会主義国ソ連の先進的な医療を宣伝するとい
う目的があったためであろうか、中ソ友好連環画と小説には、必ずと言っていいほどソ連軍の病院や手術の様子が描かれる。

連環画『鄰居』では、十月革命記念日にニーナの家の昼食に招かれた劉桂蘭が、ニーナ一家と懇意の中国人・李福厚と、紅いネッカチーフを巻いた彼の息子・蘇生と出

⁴¹ 張蘇予・郭勤初『準備着：為實現共產主義和祖國的偉大事業而奮鬥！』華東人民美術出版社、1954 年 5 月。

会う。李福厚の話によれば、旅大市が解放された直後、拾ってきた銃弾で遊んでいた息子は、突然爆発した弾丸で首に怪我をした。近所には病院もなく、李福厚夫婦が途方に暮れていると、通りかかったニーナの夫の少佐が、自動車でソ連の病院に運んでくれた。【図 34】息子は、ソ連の病院で一命を取り留め、治療費もいらなかった。そこで彼は、息子の名を「貴生」



図 34 『鄰居』 45 コマ

から「蘇生」に変えて、「ソ連のあにき（苏联老大哥）」に対する恩を一生忘れないようにしている、という。連環画では、回想をあらわす枠が画面につけられ、立派な自動車で病院に運ばれる息子の様子が描かれる。

連環画『蘇聯媽媽』では、骨折した閻寿明がソ連の海軍医院に運ばれる。隣の病床の海軍軍官イヴァーノフは、彼の気がふさいでいると、戦闘の話聞かせてくれる。

【図 35】また看護師のパーシャは、食事をスプーンで食べさせてくれる。【図 36】寿明は、「ソ連の同志はみんななんて素晴らしいんだろう！（苏联同志都是这么好啊！）」と感激する。

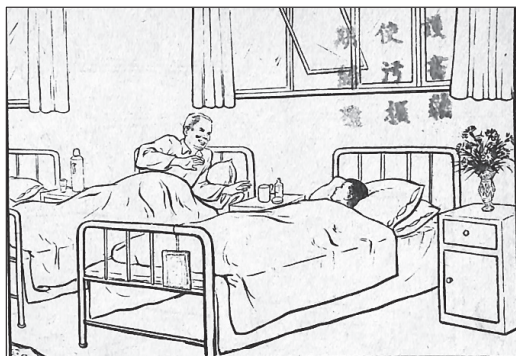


図 35 『蘇聯媽媽』 43 コマ

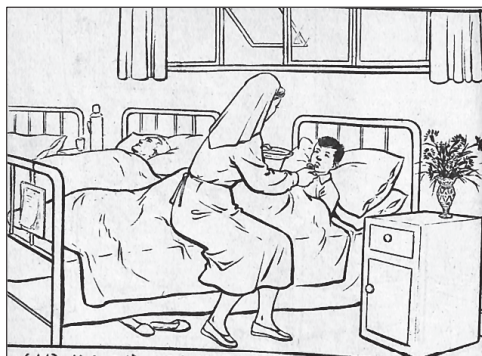


図 36 『蘇聯媽媽』 44 コマ

同様の場面は小説においても描かれ、②では、虫垂炎にかかった私（王星）が手術を受けた後、ソ連のママが牛乳をスプーンで飲ませてくれる。③では、急性腹膜炎にかかった私（馬蓮花）が、ソ連のママの血を輸血してもらう。

さらに、連環画『蘇聯媽媽』と①、②、④には、病院に向かう救急車あるいは自動車の中で、車の振動による痛みを緩和するために、ソ連のママが中国の子供を抱きかかえて守るという場面がある。ソ連の進んだ医学に加え、献身的な母の愛を強調する細かい描写であるが、複数の作品に用いられることによって、常套的な表現になって

いるともいえるだろう。

★「記分冊」、「記分簿」

中ソ友好連環画および小説を通して読み取れるのは、ソ連女性の国家建設への意欲と向学心の高さが宣伝されていることである。

連環画『蘇聯媽媽』と小説の①、②、④では、それは子供の成績向上への意欲という形であらわされており、ソ連のママの教育熱心さが「成績帳（記分冊）」、「成績簿（記分簿）」への関心を通して描かれる。

連環画『蘇聯媽媽』では、ママは「3点は成績とは言えません、よい子は4点か5点を取ってママに見せるものです！（三分不是成績，好孩子应拿四分五分來見媽媽！）」と子供たちを叱咤する。やがて実家に戻った閻寿明は、苦手な算数の2点をなくすため、ママに会いに行くのをやめて補習に励む。心配して会いに来たママは、よい成績帳を見て満足そうに彼を称えるのであった。【図37】



図37『蘇聯媽媽』62コマ

これもまた、1954年のポスターに、よく似た構図のものが見いだせる⁴²。こちらはソ連のママではなく、中国のおばあさんに5点をとった成績を見せている。後ろには、「生産模範」を表彰する壁掛けが飾られており、その下に置かれた熊のぬいぐるみや、少女の抱えている西洋人形が、「ソ連」イメージを連想させる。【図38】

一方、小説の②では、こうしたママの厳しさが、要求を満たせない子供に苦しまぎれの嘘をつかせてもいる。類似したエピソードは③にも見られ、過大な生産量のノルマが現場の労働者を疲弊させるという、「大躍進」⁴³の寓話のよう



図38 1954年のポスター

⁴² 徐寄萍『又是五分』上海画片出版社、1954年12月。

⁴³ 中国で1958年より始まる第二次五カ年計画の初年度に行なわれた、社会主義国家建設運動のスローガン。農工業生産の大幅な増産がめざされたが、自然災害やソ連との対立などが重なり、

な展開になっているところも興味深い。

中国人の自画像

★鞋

中ソ友好連環画の基本路線として、「ソ連に導かれて社会主義国家建設を進める中国」という宣伝意図があるため、その内容には、いきおい中国人のソ連人に対する憧れが表出されやすい。他方、ソ連人とのつきあいの中で、中国人が導かれるばかりではなく、ソ連人を助け、おのが自尊心を満たす瞬間というもの描かれているのが、連環画『鄰居』である。ここでは、原作の描写が忠実に図像化された、鞋にまつわるエピソードを見ていきたい。

『鄰居』の劉桂蘭は、引越ししてきた当初は、ソ連女性たちに粗末な家財道具を嗤われているのだと勘違いするほど、引け目を感じていた。しかし、季節が春から夏に移り変わるころには、彼女の心にも余裕が生まれる。あるとき、桂蘭は、我が子の安生とソ連の子供たちが一緒に遊んでいる様子を見ているうちに、ニーナの娘ターシャがしょっちゅう鞋を脱いで裸足になり、母親に叱られていることに気づく。

子供は腕白だから仕方ない、と思っていた桂蘭だったが、安生は布鞋を履いたままである。ターシャの靴が革製で、小さい子には暑いのだと気づいた彼女は、ターシャの革靴を拾い上げて大きさを計り、履かせてやるのだった。【図 39】

さっそく藍色の木綿を取り出して鞋を作ろうとした桂蘭は、ふと思い直して桃色の緞子を取り出し、ひとそろいの刺繍入りの鞋を作った。二日後、完成した鞋を贈ると、ニーナは喜んですぐにターシャに履かせた。しかし翌日、桂蘭がターシャの足元を見ると、やはり革靴を履いている。次の日も、



図 39 『鄰居』 27 コマ

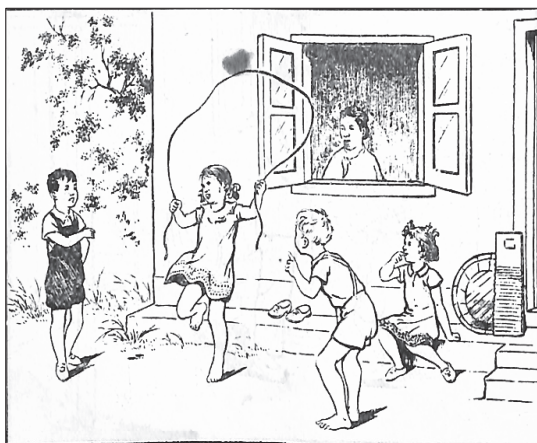


図 40 『鄰居』 30 コマ

経済の混乱や農村の荒廃を招いた。

また次の日も……。一週間待ってもターシャはあの鞋を履いてくれず、ふたたび裸足になって遊んでいる。【図 40】

心配になった桂蘭は、ターシャに理由を聞くと、「ママが、記念日に履きなさいって!」と答える。ニーナは、あの鞋を大切な贈り物だと思ってくれたのだ、と気づいた桂蘭は、思わず口元がほころび、ふたたび二日かけて藍色木綿の鞋を作り、あらためて贈りなおしたのだった。

ターシャが藍色木綿の鞋を履き始めると、建物じゅうのソ連の奥さんたちが桂蘭のもとにやって来て、子供に布鞋を履かせたいと言い出す。桂蘭はとうとう、みんなの子供にひとそろいずつ鞋を作ってやり、ゲーリヤの男の子には虎の頭のついた縁起のよい「虎頭鞋」^{フートウシェ}を贈り、大いに喜ばれた。

十月革命記念日、桂蘭がニーナの家の昼食に招かれると、ターシャはようやく刺繍入りの鞋を履いて見せる。【図 41】



図 41 『鄰居』 39 コマ

これらの鞋にまつわる一連のエピソードを通して、説明文では、以下のように描写される。「劉桂蘭は、自分の手作りの鞋がソ連の子供の足に履かれているのを見ると、心の中に言葉にできない喜びを感じた(刘桂蘭看到自己親手做的鞋穿在苏联孩子脚上，心里有說不出的高兴)」(33 コマ)。

手作りの鞋を贈ることで、人間関係を円滑に運ぶ話は、中国文学において枚挙にいとまがなく、古くは明代の小説『金瓶梅』⁴⁴、中華人民共和国では 1960 年の『李双双小伝』⁴⁵などの物語が想起される。『鄰居』は、そうした鞋の文学史に連なる作品であり、中国女性が「手作りの布鞋」を贈ることによって、外国人との間にギフト外交を展開する物語として読むことができるだろう。

おわりに

中ソ友好の物語において、中国人がソ連人に感謝される状況が、連環画『鄰居』に見られるように手作りの鞋を贈ることであったり、小説②において別れ際に骨董(象

⁴⁴ たとえば、第十六回に、李瓶児が西門慶の小者で気の利く玳安に対し、「明日、足型を持っておいで。あんたにすてきな鞋を作ってあげる」と、労いの言葉をかける場面がある。蘭陵笑笑生原著、梅節校訂『金瓶梅詞話』第一冊、里仁書店、2020 年、216 頁。

⁴⁵ 『李双双小伝』およびその連環画における鞋の描写については、稲次美穂「連環画『李双双』を 1.3 倍楽しむために」『連環画研究』第 1 号、2012 年に詳しい。

牙で彫られた「白菜とキリギリス」）を贈ることであつたりする描写には、ソ連の機械化された工業、農業やそれらの技術者に対し、中国の側には伝統的な手仕事の技術があるということが、中国人の矜持であり、実際にソ連からの客人を驚かせることもあつたという事実が反映されているのではないだろうか⁴⁶。

④においては、李明が釣りの技術を伝達することによって、カリクをはじめとするソ連の子供と仲良くなったという設定が付け加えられている。こうした、中国の民族性を重視するような描写には、「形式においては民族的、内容においては社会主義的」というスターリンのテーゼを吸収し、ソ連の社会主義リアリズムに中国の民間芸術を融合させた、中国における社会主義文化受容の様相を読み取ることができるだろう。

また、中ソ友好の物語の中では、登場人物が言語や文化の違いにお互い驚いたり、抵抗を示したりする場面があまり描かれない。ソ連人の家庭に入った中国人の主人公たちは、みなすんなりとソ連の社会主義文化に順応していく。それゆえに、連環画『鄰居』において、劉桂蘭の手作りの鞋をターシャがなかなか履いてくれない、というちょっとした行き違いは、中国人の心にわだかまりの生じた重要な場面であるといえるだろう。そして、その疑念が解決したときの喜びが、中ソの擬似家族の関係を、より親密なものにさせるのである。

ところで、こうした擬似家族の物語、とりわけ姻戚でもない赤の他人が義理の親子や義兄弟といった関係を結ぶ話は、『趙氏孤児』、『三国演義』など、中国の古典文学では珍しいものではない。現代中国語に、義父母をあらわす「寄父・寄母」「乾爹・乾媽」といった語彙があることから、現在においても行なわれる習慣であるといえる。ロシアにおいては、ショーロホフの短編小説『人間の運命』（1956）のように、戦災孤児を引き取って育てるという物語であれば、文学や映画の中にしばしば見られるようだ。もっとも、中ソ友好連環画や小説が繰り返し描いたような、ソ連人の「家族」が中国人を助けるという物語が、はたしてロシアでどの程度知られているのかはわからない。中ソ友好時期に出版されたソ連側の雑誌やグラフ誌を丹念に調べてみれば、中国における「美談」が紹介されているのかもしれない。

本稿の締めくくりに、1956年のポスター『私たちはみなゾーヤのママのよい子』を掲げておこう⁴⁷。これは、中ソの友好物語に何度も名前の出てきたゾーヤ（前掲注25）の母親と、中国の子供たちを撮影したものである。【図42】

中ソ友好物語の特徴の一つとして、しばしばソ連の文芸作品が引用され、それが登

⁴⁶ たとえば、中ソ友好の象徴として建設された北京の「蘇聯展覽館」（1954年竣工、現在の北京展覽館）は、設計はソ連から派遣された建築家や技師が担当したが、装飾に中国の民間工芸が取り入れられたことにより、中国側に自国の手工芸の再発見を促した。詳細は前掲注2 田村容子「「蘇聯展覽館」の記憶」を参照されたい。

⁴⁷ 鄭光華撮影『我們都是卓婭媽媽的好孩子』上海人民美術出版社、1956年4月。

場人物、ひいては読者の「ソ連」イメージの形成に影響を与えている点があげられよう。

さらに、③の例では、ソ連のママがヒロインに授けるのが、ゾーヤの話ではなく彼女になぞらえられた中国の女性英雄・劉胡蘭の伝記であるというような、「ゾーヤ」エピソードの変奏を見ることが出来る。

今後、こうした 1950 年代の中国の文芸に引用されるソ連作品についても調査し、それらが中国文学の中でどのような意味を与えられているのか、中ソの社会主義リアリズム文化におけるテキストの伝播と、その過程で起こりうる文化衝突や意味の変容といった問題についても、考えてみたい。



図 42 1956 年のポスター

* 本稿執筆にあたり、資料を北海道大学の武田雅哉教授にご提供いただきました。また、ロシア語・ソ連文学に関し、越野剛氏より多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

お詫びと訂正

『連環画研究』8 号掲載の拙稿「続・どうやって連環画をかくの?——『連環画報』投稿者たちの軌跡」および 9 号掲載の拙稿「農民絵師・郭同江の養豚連環画」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。この誤りについてご指摘くださった、本誌愛読者の O 氏に、心よりお礼申し上げます。

該当箇所	誤	正
『連環画研究』8 号 101-102 頁	七嬸は豚のことが気になって仕方なく、その晩こっそりと豚に薬を与えに行く。この行為は、のぞき見していた全勝婆を大いに感動させるのであった……	七嬸は豚のことが気になって仕方なく、その晩こっそりと のぞきに行く。全勝婆が豚に薬を与える姿は、七嬸を大いに感動させるのであった……
『連環画研究』9 号 55 頁	七嬸は豚のことが気になって仕方なく、その晩こっそりと豚に薬を与えに行く。この行為は、のぞき見していた全勝婆を大いに感動させたのだった。	七嬸は豚のことが気になって仕方なく、その晩こっそりと のぞきに行く。全勝婆が豚に薬を与える姿は、七嬸を大いに感動させたのだった。